ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学　健康科学部　リハビリテーション学科

助教　元山 美緒

1. 教育の責任

2023 年 3 月末現在の理学療法士養成校は 277 校、定員は 14,920 名であり、国家試験平均合格率が 90%前後とすると年々13,000 人近い理学療法士が輩出されている。高齢社会であり健康寿命延伸を目指す本邦において、理学療法士の重要性は高いと考える。

山梨県内における理学療法士養成校は本学と帝京科学大学の 2 校のみで地元に根付く医療を目指す大学として県内を中心から理学療法士を目指す学生が集っている。しかし、山梨県内の高校生数は減少傾向にあり、加えて近隣県の養成校増設など理学療法士を目指す高校生たちの選択肢は多い現状もある。学生数確保が喫緊の課題となる本学では、他養成校にはない本学の魅力を学生に伝え、他養成校に劣らない質の高い医学教育と、豊かな人間性を持った理学療法士育成が必要である。

私はリハビリテーション学科理学療法学コースの教員として、理学療法および専門科目を中心に担当している。昨年度の担当科目については以下の通りである。各授業のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている。

主要な担当科目は自身の専門領域である呼吸器系および内部障害系領域に関する理学療法の専門科目や、神経筋生理学を中心とした運動学Ⅱ、理学療法評価学、理学療法評価学実習といった理学療法全般に関わる実技科目である。その他、運動療法学や理学療法全般の演習の科目を担当している。

2022 年度

科目名	時期		受講者
理学療法評価学	2 年前期	必修	73 名
理学療法評価学実習	2 年後期	必修	61 名
運動学Ⅱ	1 年後期	必修	78 名
内部障害系理学療法評価学演習	2 年後期	必修	61 名
内部障害系理学療法学実習	3 年前期	必修	97 名

2023 年度

科目名	時期		受講者
理学療法評価学	2 年前期	必修	73 名
理学療法評価学実習	2 年後期	必修	78 名
運動療法学	1 年前期	必修	78 名
内部障害系理学療法評価学演習	2 年後期	必修	78 名
内部障害系理学療法学実習	3 年前期	必修	61 名

・授業外活動
本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

1) 日本理学療法士協会　正会員
2) 日本呼吸理学療法学会　専門会員
3) 日本呼吸理学療法学会国際委員会　ICCrPT 会員
4) 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会　正会員
5) 山梨県呼吸ケア・リハビリテーション研究会　世話人
6) 山梨県内部障害研究会　呼吸分野　世話人
7) 兵庫県呼吸ケア研究会　世話人
8) 神戸在宅ケア勉強会　世話人
9) 健康科学大学　学生募集委員
10) 健康科学大学　図書館運営委員

1)-4) においては自身の専門性でもある呼吸理学療法の研究・学術活動の拠点として所属している。自身の研究や学術大会への参加で得られた知見を本学の内部障害理学療法学の講義の中で提供している。

5)-6)に関しては、山梨県内や関東甲信越地方の内部障害系理学療法学の普及活動を中心に行っている。1)-4)で得られた知見を基に、各種研修会での講師を担当するなど、卒後教育にも力を注いでいる。

また、7)-8)に関しては前職から兵庫医科大学リハビリテーション学部　玉木彰教授、および神戸大学大学院保健学研究科　石川朗教授、他神戸在宅ケア勉強会の世話人と兵庫呼吸ケアネットワークを立ち上げ、兵庫のみでなく全国の呼吸理学療法士育成および呼吸理学療法の普及に努めている。山梨県内外で、本学所属教員として普及活動を行い、近年の呼吸理学療法分野のトピックなど情報交換に有益でもあり、学生への還元を行っている。

2. 教育の理念・目的

本学は、これからの福祉社会の発展に寄与するために、様々な複合的問題に立ち向かうことができる問題解決能力を備えた人材の育成を目指すべく、「豊かな人間力」、「専門的な知識・技術力」、「開かれた共創力」の三つの教育目標を掲げている。

理学療法教育において、専門的な知識や技術の習得のみでなく、他者を思いやる共感力・感性を育み、地域社会に貢献できる主体性ある人材の養育が教育の要であると考える。

1）自ら考え、主体的に動き、他者と協調できる理学療法士の養成

医療現場において患者を中心としたチーム医療が求められ、患者や家族、多職種との連携が必要不可欠となる。理学療法士は医師の指示の下に医療行為を行う職種であるが、「指示待ち」よりも理学療法士の視点から、いま何をするべきかという問題点を考え、自ら率先して動く主体的な姿勢も重要となる。学校教育において、教員側から指示された課題や内容をこなすのみではこの考え方は身につかず、学生が主体的に問題解決に取り組む工夫が必要となる。問題解決には「問題を認識する能力」、「解決策を考える能力」「解決策を実行する能力」が必要となり、学生１人だけでなく学生間同士のディスカッションを通じて能力を引き上げていく必要がある。

2）理学療法の面白さと、枠にとらわれない発想の展開

人間性や他社との協調性を持ちつつ、日々変化する現代医療に適応する能力や新たな分野を切り拓く創意を育成する。理学療法分野は日々変化し、多様性が叫ばれる現代においてもその分野は拡張していくことが予想される。技術や知識は日々、アップデートされ、１つの枠にとらわれない幅広い視点を持つ必要もある。

理学療法の治療には数多くの手技が存在し、その手技の新旧や、なぜこうやるのかといった根拠を解剖学、生理学、運動学レベルに落とし込み、高校では学べない創造性ある授業を展開していく。

3. 教育の方法

・アクティブラーニング

内部障害系理学療法学の授業において取り入れている。呼吸器疾患や循環器疾患、代謝系疾患の症例を中心に取り上げ、基本的な理学療法評価の列挙、問題点の抽出、治療プログラムの立案の流れを推論していく。教員による一方向的な講義形式ではなく、学生の能動的な学習への参加を促すため、学生間でのディスカッション、グループワークを取り入れる。教員も、学生が考える推論に対してアドバイスや、時にヒントを与え、学生が自ら考える道筋を作っていく過程を形成する。学生間同士で他者の意見や視点を共有しつつ、自己の視点を広げる効果があり、一人で行うレポート課題よりも学習内容が身につくよう、課題設定を行っている。

・現場に即した実践的授業

理学療法評価や実技に関して、教科書の知識や技術を基本としながら、教員自身の臨床経験を基に情報を織り交ぜて分かりやすく指導している。臨床患者の動画を基に理学療法評価を列挙、問題点を抽出させたり、実際の患者への治療提供動画を見せることで評価から治療の一連の流れを授業で体験してもらう。

・Teams やアプリを活用した授業の工夫

本学は Teams を用い、事前課題学習等も可能となった。授業前に Forms を用いた小テストにて前回の授業の復習を行う他、学生から質問があれば Teams を用いて全体に共有した。また、コロナ禍においてはコロナ罹患等により授業参加が困難となった学生がいた場合は、Teams を用いてオンライン授業も並行して行うなどを学生が平等に知識を得られる環境づくりを行った。

4. 教育の成果・評価

授業評価アンケートを活用し、授業内容の反省と改善すべき点の振り返りを行っている。授業内容についての学生からもコメントを分析し、次年度のシラバスや授業内容の改変に活かしている。

・内部障害系理学療法評価学演習、内部障害理学療法学実習

疾患や理学療法評価の講義のほか、グループワークを行っている。一括りに、内部障害といっても、その分野は呼吸、循環、代謝、がんを中心に取り扱い、呼吸の分野においても慢性閉塞性肺疾患（COPD)、間質性肺疾患（ILD)、肺炎、気管支喘息など、将来的に診療する可能性が高い疾患も多く、内容が膨大となってしまう。コメントの内容についても「内容量が多かった」との意見があった。

この点については、2 年後期開講の内部障害系理学療法評価学演習と 3 年前期の内部障害理学療法学実習を一連の流れとし、疾患に対する知識も 2 年後期に集中しすぎないように、2 年後期～3 年前期にわたって学ぶよう改変した。

・理学療法評価学、理学療法評価学実習

理学療法の要とも言える理学療法評価学は実技を中心とした授業であり、教員のデモンストレーションの後に学生間で練習といった授業内容であった。コメント等で消極的な意見等は出なかったものの、理学療法評価学 15 回開講の中で身につけるべき評価項目が膨大であり、学生が授業内で十分に身に付ける時間がとれない問題点があった。そのため、2023 年度よりは、2 年前期の理学療法評価学と 2 年後期の理学療法評価学実習を一連の流れのある授業とし、2 年前期にはバイタル測定、関節可動域測定、徒手筋力検査法に絞って実技授業を展開し、2 年後期の理学療法評価学実習にてバランス検査や片麻痺検査、歩行分析などを行う予定とし、前年度より授業内容の時間的配分にゆとりをもたせる内容に改変した。この改変についての授業評価は 2023 年度後期以降となるが、教員側も学生側からも授業内の時間的猶予がとりやすい印象であった。

5. 今後の目標

短期目標：授業内容の改変

2022 年 3 月に着任し、2022 年 4 月より授業を受け持っている。前任の教員スタイルのまま進行した授業もあり、この 1 年間実際に講義を行うことで改善すべき点が見えてきた。そのため、授業内容自体の見直しや学生の学習スタイルに添った講義の展開を再構築する必要がある。

また、令和 6 年度理学療法国家試験の範囲が改訂されることが公表されている。国家試験範囲がさらに広く学ぶ必要があり、現状の本学のカリキュラムに取り入れていく必要がある。内部障害系理学療法分野を中心に、授業内容の見直しと国家試験範囲の照らし合わせを行い、授業内容の拡充を図る。

長期目標：地域社会に貢献できる理学療法士の育成

本学は地域に根ざした医療大学であり、学生の出身も山梨県内を中心が多数を占めている。4 年次の就活の動向をみる限り、山梨県出身学生は県内での就職を視野に入れている学生も多く、県内の医療施設・介護施設に本学出身者も多数いる。そのため、県内医療を支える人材の育成と、県内医療水準の向上を視野に入れた教育を目指す。